

術後神経症状改善について

どのくらい神経症状が改善しますかという、ダメージを受けてしまった神経の回復は難しいんです。改善率は平均すると60%。手術が一番うまくやったとして、100点満点にはならないんですね。平均が60点です。よくなる方は8割くらいよくなります。他方、やったけど、そんなによくならないという方は、3割しか良くならない、稀に手術の前より悪くなるといったこともあります。30点か80点かといのは大体想像がつくんです。罹病期間が半年くらいだと治りやすいんですね。発症してから3ヶ月くらいまでに遡るのは比較的楽なんですけど、例えば5年も同じ病気になって症状が悪いとなると、神経を減圧してあげても5年前の状態の戻るのはちょっと無理ですね。だから、罹病期間が長い方は治りにくい。それから術前術後の症状が比較的軽い方は、それは治りやすいですけど、いよいよ重症で、もう歩けなくなったから手術してくれといわれてもこれはなかなか難しいんですね。あとは画像所見で、髄内の輝度変化、脊髄そのものが傷んでいるよというようなサインがある場合には、その症状はもう残りますので、治らない。それから一箇所じゃなくてたくさん病変がある。それから脊髄の横断面積がすごくぺちゃんこになっている。3割でも手術する価値があるかは、放っておくと更に悪くなってしまう可能性があるんで、今の段階でとめられればいいかもしれませんねということになると思います。だから、患者さんにも手術すればよくなりますからやりましょうというような説明はしません。僕たちがやるのはあくまでも神経を減圧することであって、治るかどうかは神経次第。そうすると、治らないのだったら、手術をしないとおっしゃる方がいる。それは勿論その患者さんの価値観というか、判断に任せることになりますけれど、ある病気は放っておくとだんだん悪くなるんですね。いよいよ悪くなってから手術しても治らないので、ある時点で、手術をします。どの時点かといっても人によって違うんですけど、一般的にはその症状があるために日常生活が不自由になってきたという時点です。例えば、お歳によっても違いますが、トイレにも歩いて行けないという時点。若い人の場合はゴルフとか登山、テニスとかができなくなるという時点。大工さんとか農業を続けられないといけないという人もいるかもしれない。そうすると、その方が求めるレベルまで改善する可能性があるのであれば、その障害が出てきた時点で手術をやる価値はあるかもしれないというふうに思います。

私たちが術前説明に用いているパンフレットに、記載している「手術目的および神経症状改善の限界について（椎弓形成術）」です。手術を行っても全ての症状が改善するわけではありません。手術の目的・リスク・限界を十分理解してから手術に臨みましょう。

手術目的および神経症状改善の限界について（椎弓形成術）

椎間板ヘルニア、椎体の変形（骨棘形成）、椎体不安定性、後縦靭帯や黄色靭帯の肥厚や骨化、などに伴い圧迫を受けている脊髄の減圧を行います。

脊髄を減圧することにより、

- i) 現在ある神経症状の改善および、
- ii) 今後の神経症状の悪化予防を目的とします。

頸椎症・後縦靭帯骨化症に対する手術療法は脊髄の減圧を目的としたものであり、すでに損傷を受けている脊髄機能を完全に回復させることは不可能です。術後神経症状の回復には限界があることを理解された上で、手術を受けられるかどうかを決断なさってください。

椎弓形成術による神経症状の改善度は約 60%（30～80%）と報告されています。

神経症状回復に影響する因子として、

- i) 脊髄症状の重症度
- ii) 罹病期間
- iii) 画像所見（多発病変、脊髄圧迫の程度、脊髄髄内の輝度変化など）

などが有ります。罹病期間が長く術前神経症状が重篤なほど、また画像上脊髄の圧迫が高度で多椎間にわたって脊髄が圧迫されていたりすでに脊髄損傷を認める場合には、術後神経症状の回復は限界があります。